

『お空』

地平線のお空は
黒雲が覆い
樹々が激しく
揺れています

私の頭上は
青いお空が広がり
白い雲が
流れています

『春』

海に波が有るように
陸にはそよ風が有る

海に風が有るように
陸にも小春日がある

海に黄金色が染まるように
陸には沢山の希望の燈が灯る

海に波が有るように
陸にも春が訪れる

『国旗』

ビルの谷間の吹く風は
イギリス国旗がはためいて
ドアーの内にはアンテーク
ランタに香りが色づいて

ビルの谷間を吹く風に
アメリカ国旗がはためいて
窓にはマドンナのポスターが
入り口にはモンローが

遠く離れて日本の旗が
一つぼったり揺れている
笑いも憩いも忘れた様に

日本の大人が歩いているよ

『お家』

お家の中にとくとくとね
何やら息が詰まってき
何やら気が滅入ってき
だからお外に出るの

冬のお外は寒いけれど
お外はやっぱり明るいよ
かしの木は裸だけれど
雀が止まって鳩が止まって

冷たい風がひゅーっと吹いて
畑には雪がまだ有って
枯れ草の丘を
ひゅーっと滑ってまだ登る

だけどお母さんが
怒って心配するから
温かいスープを飲みたいから

僕はお家に凱旋するんだ

『二月』

二月に入りました
夕暮れが少し延びました
でもまだ人は厚着です

二月に入りました
小川が流れています
いつもと同じく人が通ります

世間が煩いのは
それは人の世界のこと
ゴーゴーと風が空を走っています

日向は温かく日かげは冷たく
空の青さを小川が写し
辺りがのんびりとしている

二月になりました
いつでも時は未知へ未知へと
無限の中を経っていく

『二月の空』

二月のお空は忙しい
遠く透き通った青空の中を
北風がピューッと吹き荒れたり
南の風がゴーゴーと吹き通ったり
お空はいつも風が吹き通っている

針葉樹が左右に揺れに揺れ
裸の小枝が風を切って音を発している
土手は風が素通りで
川の水が波立って
春の足音が聞こえてくるんだ

春はいつだってお空の中を
吠えながらやってくる
北風が負けまいと吹き返す
だから二月のお空の中は

北風と南風の吹き合戦で忙しい

『空き地』

二月の穏やかな日を浴びて
空き地の奥の
梅の木が咲いているよ
梅畑も満開に咲いているよ
白く淡いピンクに光りながら

僕はその下を走るんだ
小犬のジョンと遊びながら
風を切って気持ちがいいよ
頭には梅の花が
足元は柔らかい土の香りが

お母さん僕は嬉しいんだ
満開の花の下を
走り回って
畑の土の上をかけっこして
僕は誰よりも幸せなんだ

おとなはどうして
危ないよお服が汚れるって
言うんだろうか
ジョンと一緒に走っこすれば
僕はこの世の王様さ

子供は明るさがいっぱいあるから
希望の光をいっぱい浴びているから
子供はこの世の王様さ

『二月の街』

冬の大人のお洋服は
沈んだ鉛の色
日も短いし
くすんだ空日も多いから
明るい色のお洋服を着たいのに
どの大人も黒やねずみや茶のお洋服

だから母親もそんなお洋服を
私に着せようと怒り顔
くすんだ黒や茶色など嫌いだよ
冬には明るい色が好きなんだ
緑や青やそんなお洋服を着れたなら
そういうわけで冬の大人はみんな
心が沈んでしまうのだ

『飛べない鳥』

いつも羽ばたくとも
お前はいつだって飛べない

羽ばたけども
いつもお前は飛べない

でも私は
そんなお前が好きだ

『飛べない鳥一』

飛ぶことの出来ない
鳥は哀れだ

鳥はいつだって
大空を自由に飛ぶもの

飛ぶことの出来ない
鳥は哀れです

『飛べない鳥三』

飛べない鳥は
いつも空を見上げている

自由に飛べたらと

飛ぶことの出来ない鳥は
いつも大空を見つめている

自由に飛べたらと

飛べない鳥は
いつも空を見上げている

『飛べない鳥四』

飛べない鳥は
いつも空を見上げて

夢の中で飛んでいる

眠りの中で安らんでいる

飛ぶことの出来ない鳥は
いつも大空を見上げている

『どんな場所』

おとなが子供に戻る場所って
どんな場所なのだろう
だって父も母もときおり
そんな瞳をしている時が有るんだ

まるで幼児のあの時が
黄金の輝きが有ったような
まるで子供のあの時が
真珠の光で照っていたような

おとなの瞳にときおりそんな
憧憬が映っているんだ
夕焼けを受けてお母さんはベランダで
お父さんは帰宅の一本道で

なのにお母さんは私のおいたをしかる
なのにお父さんは私との約束をほごに
する
まいにちの私はそんな日々
黄金と真珠の輝きの内にいるというのに

おとなが子供に戻る場所って
淋しい時なのだろうか
悲しい時なのだろうか
嬉しい時なのだろうか

『魔法使い』

子供は魔法使い
どんなものにだってできるんだ
寝室のベットをお船にして
大海原をこぎ出して
遠くのお国へ行くことだって
できるんだ

でもねお母さんに見つかると
怒って大声で叫ぶんだよ
お部屋をきれいにしなさいって
なんど言ったらわかるのよ
時にはおやつももらえない
兵糧攻めさ

こればかりは
魔法を使えないんで

ついには私が負けてしまう
お部屋をきれいにしてお母さんの作った温かいスープは
最高にうまいんだ

『五月の薫り』

木漏れ日の中を
ざわざわと音を發てて
風が過ぎる
鳥の囀りを聞きながら
雑木林の中を風が吹いていく

森の中には小川の水音
来る春の水響き
射し込む光を浴びて
虫たちが飛び跳ね舞う
風が優しく流れている

木漏れ日がきらきら光り
小川の水は冷たく透き通り
木々は枝を伸ばし新緑の葉を付け
下界の風が森の中を通るたび

美しく濾過されていく

End all [*Childhood and Birds(flightless)*]